

## 『身体としての書物』

今福龍太著

東京外国語大学出版社 二〇〇九年三月

『書物にならんとする世界』ではなく、これらの『世界にならんとする書物』たちのさまざまに異なつた野心を受け継いだまま、わたしたちは二一世紀への敷居をまたいだ。この新たな世紀は、数千年におよぶ人類の知性史において書物に託されてきたアイデアが、本という外形のなかで成就されてゆくかどうか、が自明ではなくなつた、はじめての時代である」(七頁)。世界が書物にならんとするというイメージを抱いた一九世紀後半のステファヌ・マラルメから、逆に書物が世界にならんとするというふうな発想の転換を図つた二〇世紀前半のジェイムズ・ジョイスを経たという認識のもと、著者である今福氏がこのように診断するいま、まさに立ち上げられた東京外国語大学出版社の嚆矢を切つて昨年三月に公刊された本書は、書物という概念において「旧来の本というメディア」(八頁)と「電子テクノロジーが開いた新しいテキスト空間」(同)とがせめぎあう現在の状況のなかで、それでもなお書物をもつ物質性の意味を問いつつ、この問題を自覚的に俎上に載せたいくつかの具体的な文学作品をよりどころに著者が思考を繰りひろげた仕事で

ある。著者は、「書物としてのアイデア」(二〇頁)に「事物と精神性の統合体としての本」(同)という定義を与える。「身体としての書物」とは、このように本として表現されるある不変の物質性の謂いなのである。

何よりも本書が物質性に定位するものであると言えるのは、本書のなかの引用が括弧ではなくゴシック体でなされているということである。「小型本の一行のスペースにできるだけの小さな活字を凝縮して収めるといふ実践的・経済的な理由から」(二八頁)生まれたというイタリック体の成り立ちを喚起するのをはじめ、著者が受けもつた学部のゼミナール(このゼミナールは本書が生まれるもととなつた)で実際に学生に本を制作させたり、さらには活版印刷術の歴史に言及しつつ造本のプロセスを表わす「ページネーション」の詳細について論じたりするなど、書物の物質性に著者がきわめて自覚的であるのはまちがいない。だから、引用箇所をゴシック体で表示するという試みは、字体をあえて変え、浮き立たせることによつて書物の物質性をいやがおうにも読者に意識させる効果をもつている。まるでそこから、個々の形態をとつた具体的な本がつぎつぎと立ちあがってくるとでもいうかのように。

ところで評者は、右のことに関連して、インターネット検索エンジンで「ゴシック体 引用」を検索し、それからさらに英語の「sans-serif citation」、ドイツ語の「Grotesk Zitat」を検索してみた。すると、上位の検索結果では少なくとも、引用をゴシック体でおこなうという例は見つからなかった。評者がこゝういった検索をおこなつたのは、引用をゴシック体で表示するという著者の試みが独自のものであるのかどうかについて

蓋然的ながらもイメージをつかんでおきたいからだ。著者は、インターネットに依存するこのような行為について、少なくとも本書の枠組みでは肯定的にとらえることはないとはつきりと宣言している。だが、にもかかわらず、わたしたちはつねにすでにこのような行為をある程度身体化してしまっているという現状がある。現に、ゴシック体、*sens-serif*、それに *Grotesk* という概念が、それぞれに歴史的成立を異にしながらも実際の使用において似たような外延のうちにあることを評者はこの検索という行為をつうじて知ったのである。このような仕方では、情報をついに消費しているだけなのだ。著者ならば言うかもしれない。だが、わたしたちは身体性を拡張することによって、このような情報をもとにさらに何かをつくりだしている。

「身体性」とは、人間の肉体的に制限されたそれと外延を同じくするものではない。わたしたちは身体性を拡張する。けれどもこのいとなみは、電子テクノロジーが新しいテキスト空間を可能にしてからようやくくじられてしまったものではない。人間が道具一般を使い始めて以来、皮膚や筋肉や神経でつながった肉体的な身体を越えた身体性の拡張はすでにして起こっていた。そして、世界が書物たらんとしていたときも、また書物が世界たらんとはじめてからも、この拡張はつねにすでに進行している。世界の書物化と書物の世界化は同じ事態を表わすメダルの両面である。よく考えられるように、世界の書物化は知による世界の植民地化ではない。かといって、書物の世界化が知の民主化すなわち脱植民地化なのではない。これらの過程はそういつたことを越えたところにある。書物はつねにす

に身体であり、にもかかわらずそれはつねにすでに肉体に制限された身体性を越えていた。そうでないとしたらたとえ、一八世紀の哲学者イマヌエル・カントが『判断力批判』で崇高なもの例として挙げていたエジプトのピラミッド、ローマの聖ピエトロ聖堂を、自分の生まれた町から生涯一度も出ずにどうしてかれはすくなくして崇高であると想像できたのだろうか。これは、著者が終章でエドゥアール・グリッサンに依拠しつつ提起している書物のイメージ、「水牛としての書物」(三二―三三頁)にしても同じことである。グリッサンにまつわる特殊な文脈でいえば、この水牛はマダガスカルやマルティニク島に実際にいる水牛である。少なくとも日本列島の圏域で生活している人間は、現実の水牛に接触する機会をほとんどもない。だがわたしたちは、「身体としての書物」をつうじて、この水牛をつねにすくなくして「不変数」として「透視」(同)している。著者がインターネットに対してとる敵対的な態度とは裏腹に、「書物にならんとする世界」と「世界にならんとする書物」とのあいだに決定的な断絶はないし、後者の過程の連続性のもとで著者が課題として考えようとしているインターネット時代における電子テキストとしての書物とのあいだにもそのような断絶はない。書物とはつねにすくなくして拡張する身体である。ただし、この拡張は膨張したり、また逆に収縮したりするイメージとしてとらえてはならない。それは、著者自身が「今後もまだつづいてゆく」(三一―三七頁)本書の主題の基層的イメージとして本書の末尾でわたしたちにゆだねる、不変数としての「水牛としての書物」なのである。

(大澤俊朗)